

旧内田家住宅（きゅううちだけじゅうたく）主屋、座敷、隠居屋、新納屋及び表門、米蔵、戌亥蔵、納戸蔵、味噌部屋・漬物部屋・焚物部屋、箱蔵、土地（おもや、ざしき、いんきよや、しんなやおよびおもてもん、こめぐら、いぬいぐら、なんどぐら、みそべや・つけものべや・たきものべや、はこぐら、とち）

員数：9棟

所在地：愛知県知多郡南知多町大字内海字南側 39 番地

所有者：南知多町

1 指定の理由

旧内田家住宅は、主屋の平面形式や附属建物の構成などに廻船主の住宅としての特徴をよく備え、明治期初期に成立した屋敷構えをほぼ完全に留めている。知多半島における廻船業の隆盛を伝える廻船主の住宅である。

（指定基準＝歴史的価値の高いもの及び流派的又は地方的特色において顕著なもの）

2 概要

旧内田家住宅は、知多半島南寄りの西岸、廻船業で栄えた内海地区の東寄りに南面して建つ。

内田家は、江戸末期から明治期にかけて複数の廻船を所有し、内海を代表する大船主の家であった。明治中期になると、廻船業から撤退する一方で郵便、乗合自動車、観光開発に進出し、内海貯蓄銀行の創立に参画するなど、地元で事業を展開した家である。

敷地は、内海川が伊勢湾に流れ込む河口からやや上流の東側の山裾に位置する。敷地西側の直角の通路に面して表門を開き、街路に接する北面に裏門を設ける。敷地中央に南面する主屋と座敷を並べ、敷地西端に達する主屋土間部の南には表門を挟んで新納屋、北西端には戌亥蔵を配し、その東には敷地北端に面して隠居屋、納戸蔵を並べ、敷地東北端から南に向かって直角に味噌部屋・漬物部屋・焚物部屋、箱蔵を配している。座敷南側の内庭に接して米蔵が建ち、敷地南端部は山の斜面に接する。

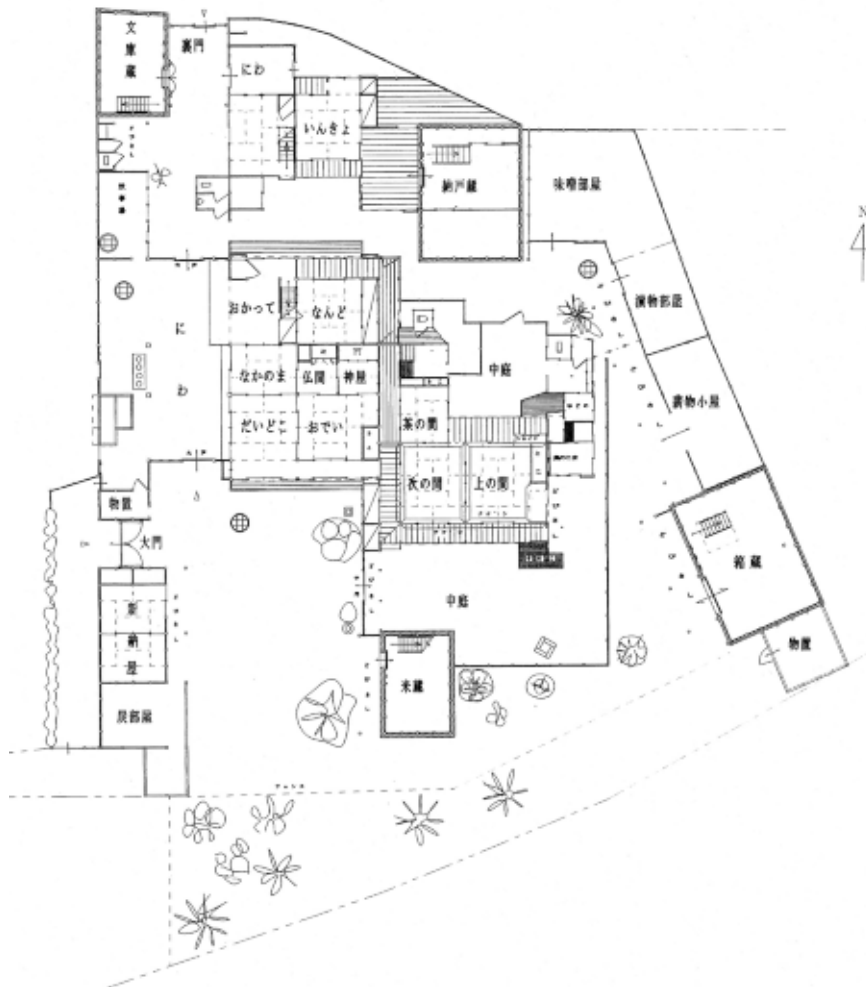
建築年代は、主屋が棟札により明治二年の建築であることが判る。また、明治五年の家相図に現在と同様の建物群が描かれていることから、明治五年までには敷地内の全ての建物が完成していたと考えられる。

旧内田家住宅は、江戸末期に計画され近代に入って完成したもので、座敷を中心に質が高く、主屋は伝統的な民家から発展した平面構成を基本としながらも、神屋¹（かみや）を設けるなどの特徴が見られる。平面図や家相図などから、建設後の改造も少なく、屋敷全体にわたって当初の姿をほぼ完全に留めていることも明らかであり、太平洋側では類例の極めて少ない廻船主の住宅として高い価値を有しており、土地と併せて保存する。

神屋¹：神のやしろ。旧内田家住宅の主屋には、一間幅の造付けの棚に宮殿を納め、左から金毘羅宮、多賀大社、伊勢神宮、熱田神宮、秋葉神社が祀られていた。特に金毘羅宮は航海安全に関わるものとして、廻船主の崇敬を集めていた。



旧内田家住宅 建物外観 (南知多町教育委員会提供)



旧内田家住宅 現状平面図 S: 1/200 (南知多町教育委員会提供)